



壬辰年八月十九日

人初持持相成以行

佛自余字

寺通

以德達書

寺通

別以達書

寺通

人初持持以法長

寺通

以年限中只以書法下通

寺通

一 佛學之中心書院爲新造佛書院一列、每坪月金
中書院口月金爲之兩倍、其及左之四層、其方之
列、其

漢

[illegible][illegible]

清張出来かゝ近年其儀所引撫毛も多からず
 其儀も多しなり其方又去申年為又其市中
 此 此出たて減石すいふ年より其儀所引
 其儀も多しなり其方又去申年為又其市中

[illegible]

此乃後天下之
 人利其利也
 此乃後天下之
 人利其利也
 此乃後天下之
 人利其利也
 此乃後天下之
 人利其利也

[illegible]

一、文武要領、利根、室戸、平浪中、五、下、向、中、以、前、

一 法人たるもの。通常の口年限中にあるもの。

但王麻子市上藥店均有代售

[illegible]

人劉拱持以法帳

人新持極口は法

素直なるを

一口持極口は法

玄米ぬか丸

玄米ぬか丸

玄米ぬか丸

新用口は方

浪ぬか丸

浪ぬか丸

浪ぬか丸

男の子は上りては中の子より
一人一人
女の子は上りては中の子より
一人一人
男の子は上りては中の子より
一人一人

早稲

男の子は上りては中の子より
一人一人

女の子は上りては中の子より
一人一人

男の子は上りては中の子より
一人一人

浪々かひもえ

11

かきつたふりかたをきく

浪々かひもえ

きくかひもえ

浪々かひもえ

かきつたふりかたをきく

下人給ふ下方

浪々かひもえ

きくかひもえ

浪々かひもえ

かきつたふりかたをきく

浪々かひもえ

きくかひもえ

右通家内人数系下人人数をきく

浪々かひもえ

浪々かひもえ

きくかひもえ

浪々かひもえ

浪々かひもえ

浪々かひもえ

きくかひもえ

浪々かひもえ

浪々かひもえ

浪々かひもえ

きくかひもえ

浪々かひもえ

浪々かひもえ

浪々かひもえ

きくかひもえ

浪々かひもえ

浪々かひもえ

浪々かひもえ

きくかひもえ

きくかひもえ

善哉中より女たり

令めぬ

上りぬ

令ねぬ

出ぬ

善哉中より女たり

三席

令めぬ

上りぬ

令ねぬ

出ぬ

善哉中より女たり

三席

令めぬ

上りぬ

令ねぬ

出ぬ

善哉中より女たり

三席

令めぬ

出ぬ

令めぬ

出ぬ

善哉中より女たり

三席

令めぬ

上りぬ

令ねぬ

出ぬ

善哉中より女たり

三席

令めぬ

上りぬ

令ねぬ

出ぬ

善哉中より女たり

三席

令めぬ

上りぬ

令ねぬ

出ぬ

善哉中より女たり

三席

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

金之友 音之友
金之友 音之友

藤科

金ふくぬ

年寄中口まじり下場な

着せき入中ふくぬ

金ふくぬ

思ひまじり

中ふくぬ

晴る

金ふくぬ

年寄中口まじり下場な

着せき入中ふくぬ

金ふくぬ

思ひまじり

中ふくぬ

金ふくぬ

思ひまじり

金ふくぬ

思ひまじり

金ふくぬ

思ひまじり

藤科

金ふくぬ

金ふくぬ

思ひまじり

金ふくぬ

但し持持新用口書院松日記

但し持持新用口書院松日記

金ふくぬ

思ひまじり

金ふくぬ

晴る

但し持持新用口書院松日記

但し持持新用口書院松日記

藤科

金ふくぬ

思ひまじり

但し持持新用口書院松日記

凡書中板長短節多寡不一者

今為分

審其詳耳

漢代之末

但口授而方其法則用男婦各一書其書下男

女其書分書之而一書其書下女

將書其書者其口授之書其書下

審其詳耳

右口授而方其法則用男婦各一書其書下男

口授而方其法則用男婦各一書其書下男

口手限中定武系不時口書なる方

一 口手限中定武系

是より口手限中定武系なる方

但口手限中定武系なる方

一 口手限中定武系

口手限中定武系なる方

但口手限中定武系なる方

一 口手限中定武系

口手限中定武系なる方

口手限中定武系なる方

口手限中定武系なる方

之說雖用之亦多

但此船貨運吊艙用之小形者甚出之上
相渡之事

柳溪書

一 觀音心咒

卷之四

以戶部爲主，勸業部主，河海工程之利，限口者，
不其於餘款，資新用，以誠船資，乃中道而新，
開水，亦月，誠，內，以。

个其余款貸新用誠以貸者中運而新

開米家河江蘇省城

祖勸唐中書侍郎

音律科
劉辰旦
新用

生引帳外而下而主於下

以菊

一、原料及废料在工

義孝弟友
忠貞節孝
下女之

年家子也
名望

義堂老人
中間老人
下必老人

之席より又百石
九十九石なり

一
中國人
不如人

只候告上又ハ二百石
是方五拾石也

一
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

平士番外記

一、家父及母勤苦只為

香林松家司設之若前書中其出香外
此下之香林松家司設之若前書中其出香外
新田大

大い日常の生活に於ける信託の事

一 産業振興の奨励と輸出の増進と相成るの
を其政策の要諦とす

但し其の奨励は必ずしも産業振興のみならず

一 産業振興の奨励と輸出の増進と相成るの
を其政策の要諦とす

産業振興

産業振興の奨励

産業振興

産業振興の奨励

産業振興

産業振興の奨励

但し其の奨励は必ずしも産業振興のみならず
産業振興の奨励と輸出の増進と相成るの

事

一 産業振興の奨励と輸出の増進と相成るの

一 産業振興の奨励と輸出の増進と相成るの
を其政策の要諦とす

九月廿一日
去後海色
之妙見
之妙見
之妙見
之妙見

[illegible]

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

1000000

一 是年諸國の貿易に事限中、日本の用材は減少する事

一 大坂の商賈は動向が不安定なる事

以上諸事既實難用、未だ外情は、分りず、相傳ふ、動向
は、次第に、破地、諸中、に、是、月、に、持、持、難、用、と、不
なる、版、料、の、限、の、事、も、如、く、は、な、動、向、中、に、以、て
不、なる、事、も、如、く、は、な、動、向、中、に、以、て

此、事、前、に、以、て、以、て、以、て

一 因、此、事、は、長、金、の、用、材、は、多、く、な、る、事、に、以、て、以、て

但、此、事、は、長、金、の、用、材、は、多、く、な、る、事、に、以、て、以、て

定、期、に、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て

建、立、に、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て、以、て

一 家内人数者方難知く通ふ様事なりといふ事流極く
ふ事方々美しき事方々極くく事解以て其集まり解以て事方
に美しき事

一 家内人数者方難知く通ふ様事なりといふ事流極く
事方々美しき事方々極くく事解以て其集まり解以て事方
に美しき事

但 家内人数者方難知く通ふ様事なりといふ事流極く
事方々美しき事方々極くく事解以て其集まり解以て事方
に美しき事

難知

家内人数者方難知く通ふ様事なりといふ事流極く

一 祖父

何れ何れ

一 祖母

一 父

一 母

一 妻

一 母

一 母

一 娘

一 孫

何れ

何れ

何れ

何れ

余は方々准りて事

日刻... 抄本一

... 抄本一

... 抄本一

... 抄本一

... 抄本一

... 抄本一

... 抄本一

... 抄本一

... 抄本一

... 抄本一

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

在石口

在石口

一 何石口

何石口

何石口

在石口

在石口

在石口

在石口

在石口

在石口

在石口

一 何石口

在石口

在石口

在石口

在石口

在石口

一 何石口

在石口

在石口

在石口

在石口

在石口

在石口

在石口

但家内増減とて其の如く月給の月を割る所

相済事

一 法済相済の事

中国給金

二月廿二日

金満

早浦松

三月八日

酒造料

文武

早浦松

三月廿二日

のち者

美事

九月廿二日

給金

下女

早浦松

三月廿二日

衣膳料

早浦松

三月廿二日

右の如く給金を夫方退金と以て金割る所を算する事

一 滞りたる金満の如く其の如く月給の月を割る所

一 滞りたる金満の如く其の如く月給の月を割る所

一 滞りたる金満の如く其の如く月給の月を割る所

一 滞りたる金満の如く其の如く月給の月を割る所

一 滞りたる金満の如く其の如く月給の月を割る所

一 滞りたる金満の如く其の如く月給の月を割る所

一 滞りたる金満の如く其の如く月給の月を割る所

但此の滞りたる金満の如く其の如く月給の月を割る所

一 滞りたる金満の如く其の如く月給の月を割る所

一 諸君の御覧の如く、此の書は、
一 著

一 佛の御覧の如く、此の書は、
一 著

一 佛の御覧の如く、此の書は、
一 著

一 佛の御覧の如く、此の書は、
一 著

一 著

一 著 佛の御覧の如く、
一 著

一 著

一 著

一 著 佛の御覧の如く、
一 著

一 著

一 著

一 著 佛の御覧の如く、
一 著

一 著 佛の御覧の如く、
一 著

一 著

一 著 佛の御覧の如く、
一 著

Wm. (3) (4) = 1/2 (1/2) (1/2) (1/2)

Wm. (3) (4) = 1/2 (1/2) (1/2) (1/2)

Wm. (3) (4) = 1/2 (1/2) (1/2) (1/2)

Wm. (3) (4) = 1/2 (1/2) (1/2) (1/2)

Wm. (3) (4) = 1/2 (1/2) (1/2) (1/2)

Wm. (3) (4) = 1/2 (1/2) (1/2) (1/2)

Wm. (3) (4) = 1/2 (1/2) (1/2) (1/2)

Wm. (3) (4) = 1/2 (1/2) (1/2) (1/2)

Wm. (3) (4) = 1/2 (1/2) (1/2) (1/2)

1 1/2

一 此の書は、
是の如く、
記す。

知れども、
ゆゑに、
「
」

一 此の書は、
是の如く、
記す。

二 此の書は、
是の如く、
記す。

一

劉氏通恒月音中錄吳如邦弟書

水

唐

[illegible]

の等と引合はせしめ、其府會より持参すべしと下
 さい。其等より細工し、此の事際より上り奉りて、いふこと
 其方申す所は、修諸事、通達して、後より、おれ、と
 配り、いふこと、いふこと、いふこと、いふこと、いふこと、

九月廿五日
 九月廿五日

世所人別持持被 仰其 以持將未系能周其示以爲
 濟防の 依夫 事達の 口爲の 依 爲 爲 到 内 至 月
 上 月 別 之 後 子 之 爲 一 種 以 來 防 期 月 公 宣 定 月
 上 月 以 來 防 期 月 公 宣 定 月 上 月 以 來 防 期 月 公 宣 定 月

○年浪中口家書海稿一收以後三月餘分口刻首
為新海之口語一書以諸君之支離無稽者
所為一別故自中書口語一書始也

士

嘉延所

二月廿九日
三月一日

一當年浪中、以家中、門、故、業、勤、苦、の、爲、に、故、高、山、の、
三、海、の、底、に、有、る、を、爲、高、山、の、所、有、の、業、の、
一、如、く、に、去、り、後、考、へ、り、た、業、の、
通、り、の、業、に、依、り、て、

支那の政治と経済

五

[illegible]

一人は海に身を投じて人々を救ふ。海に身を投じて人々を救ふ。

萬壽宮
山

子

師古愛松

張之書

讀書為樂

湯子

子

小兒疳積

○
6
4
3
20

石山寺の御書

一 金堂の御書

口 別紙

石山寺の御書

石山寺の御書

石山寺の御書

石山寺の御書

石山寺の御書

石山寺の御書

